

07262P-00 診断士

最速合格のための

2018
年度版

スピード テキスト4

経済学・経済政策

TAC中小企業診断士講座

SPEED



^う ^か
**合格るから選ばれている、
スピード合格への定番テキスト!**

はしがき

企業を取り巻くいくつかの外部環境の1つに「経済的環境」があります。「経済的環境」とは、企業経営に直接的あるいは間接的に影響を与える具体的な経済動向を指します。たとえば「景気の良否」や「個人消費の増減」などは、企業収益に対してさまざまな影響を与えることが推測されます。

このように、企業の経営成績は、企業自身の経営努力もさることながら、企業の外部にある経済動向によっても変動することがあるため、これら外部の経済動向を正確に見極め、その影響に適切に対処していくことが、企業のマネジメントや経営コンサルタントに望まれることになります。

経済学とは経済事象をモデル化する学問です。大きく、1 消費者、1 企業、そしてその集合である 1 つの市場について主に扱うミクロ経済学と、一国全体の経済活動を扱うマクロ経済学に分かれます。経済学はモデル化するがゆえにグラフや数式を多用することになります。またマクロ経済学では一国全体の経済活動について学習していきますので、なかなか身近に考えることができない論点もあります。このようなことから、これから経済学の学習を始める方にとっては、最初のうちは心理的なハードルを感じるかもしれません。

本書はそれらの点を考慮しつつ、初学者にも十分理解できるように、試験対策上、必要な論点に絞って解説しています。「経済学・経済政策を学習するにあたってのポイント」や「本書の利用方法」も参考にいただき、効果的に学習してください。皆様が本書を活用され、見事合格されることを祈念しています。

2017年11月
TAC中小企業診断士講座

本書の利用方法



本書は皆さんの学習上のストーリーを考えた構成となっていますが、テキストを漫然と読むだけでは、学習効果を得ることはできません。そこで皆さんに、効果的な学習を行うための方法をご説明していきたいと思います。基本的な学習にあたっては次の1～3の順で学習を進めるよう意識してください。

1. 学習範囲の全体像を把握する
2. インプット学習を行う
3. 本試験との関係を確認する

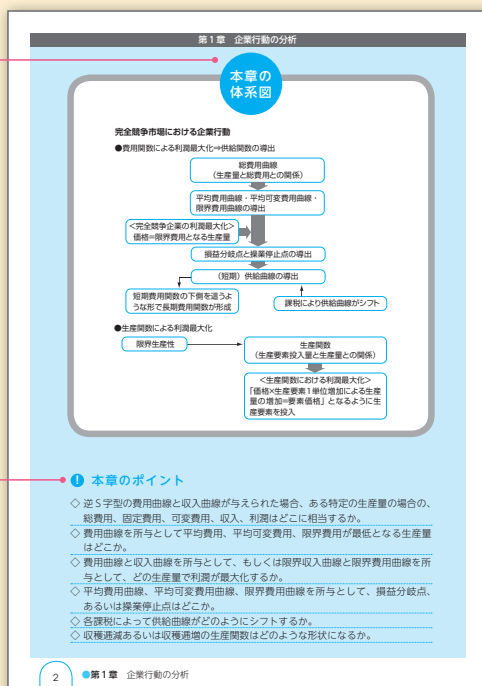
1. 学習範囲の全体像を把握する

xv・xviページに学習範囲の「科目全体の体系図」を掲載しています。科目の学習に入る前に、まずこの体系図をじっくりと見てください。知らない単語・語句等もあると思いますが、この段階では「何を学ぼうとしているのか」を把握することが重要です。

また、各章の冒頭には、「本章の体系図」を掲載しています。これから学習する内容の概略を把握してから、学習に入るようにしましょう。「本章の体系図」は、「科目全体の体系図」とリンクしていますので、科目全体のなかでの位置づけも確認してください。



まず、全体像を把握。



2. インプット学習を行う

本書には、理解を助けるための多くの図表やイラストを収載しています。また、「補足」「参考」などの補足的な解説も充実しているので、独学者の方も安心して学習していただけます。

テキスト本文において、特に重要な語句については**太字**で表示しています。また、語句の定義を説明する部分については、色文字で表示をしています。復習時にサブノートやカードをつくる方は、これらの語句・説明部分を中心に行うとよいでしょう。

！
出題可能性や内容面など特に重要と考えられる箇所を示しています。

！
重要な語句は太字で表示しています。

！
語句の定義を色文字で説明しています。

！
本試験ではどのように問われるのか確認しましょう。

4 パレート効率性

前節で学んだ「余剰」という概念は、1つの財に焦点をあてた場合の分析（部分均衡分析）で主に用いられる。一方、多数の財が存在するような場合の分析（一般均衡分析）にも適用できる厚生基準として、パレート効率性という概念がある。

1 パレート効率性（最適性）

①▶パレート効率性の定義

ある状態がパレート効率的 ⇨ 他の誰かの効用を悪化させない限り、どの人の効用も改善することができない状態

言い換えれば、パレート効率的でない状態は、少なくとも1人の効用を改善することができる方法が存在しているのに、それが行われていないという意味で**無駄**が存在している状態である。

②▶パレート効率的な状態の例

④ リンゴ10個とビール10本があり、これをAさんとBさんに分け与えるでしょう。ただし、Aさんはリンゴも好きだしビールも飲むが、Bさんはビールは飲まないでしょう。このとき、2人に両財を5個ずつ分け与えている状態はパレート効率的ではない。なぜならば、ビールを飲まないBさんから、飲むAさんに5本のビールを回すことで、ビールを飲まないBさんの効用を一定に保ちつつ、Aさんの効用を増加させることができるからである。つまり、5個ずつ持つという状態は、Aさんの効用を増加させるという機会を見逃しているという点で**無駄**が存在している状態なのである。

一方、リンゴもビールもすべてAさんがもらうという（不公平ともいえる）状態はパレート効率的である。なぜなら、AさんからBさんにリンゴでもビールでも少しでも回すと、Bさんの効用は上がるかもしれないが、同時にAさんの効用が必ず低下してしまうからである。

例

パレート最適な状態から配分を変更して別のパレート最適な状態へ移行するとき、ある個人を有利にすれば、必ず他の個人は不利になってしまう。
H23-14 エ (O)

117

3. 本試験との関係を確認する

テキスト本文の欄外にある **H29 6** という表示は、平成29年度第1次試験第6問において、テキスト該当箇所の論点もしくは類似論点が出題されているということを意味しています。本試験ではどのように出題されているのか、テキスト掲載の「設例」や過去問題集等で確認してみましょう。

2 投資に関する理論

2 トービンの q 理論

● **トービンの q ...**

トービンの q 理論では、株価が投資に影響を与えると考え、①株式の時価総額（株価×発行済株式総数）、②現存の機械設備等の買換費用という2つの側面に焦点をあてる。正確な導出方法は少々複雑なため、以下ではトービンの q 理論から導き出される結論だけを明示する。

トービンの q は以下のように求められる。

$$q = \frac{\text{企業の市場価値}}{\text{現存の資本ストックを買い換える費用総額}}$$

分子の「企業の市場価値」は、「株式の時価総額+債務の総額」である。
 分母の「現存の資本ストックを買い換える費用総額」は、企業が保有している設備、土地などの資本ストックを、すべて市場価格で新たに買い換えるとしたときにかかる費用である。
 トービンの q が1より大きい場合が投資が行われるかどうかが決定される。

トービンの $q > 1$ → 投資が行われる
 トービンの $q < 1$ → 負の投資（資本ストックの減少）

多 考

トービンの q のイメージ

「企業の市場価値」とは貸借対照表の右側の「負債と純資産の時価総額」のイメージである。一方、「現存の資本ストックを買い換える費用総額」とは、貸借対照表の左側の「総資産の時価総額」のイメージである。

$q > 1$ のときは、右側の「資金の源泉」より左側の「資金の使途」のほうが少ないので、左右を一致すべく、投資を行い設備が増える。

総資産

負債
純資産

$q < 1$ のときは、右側の「資金の源泉」より左側の「資金の使途」のほうが多いので、左右を一致すべく、有形固定資産を減らす（負の投資）。

総資産

負債
純資産

過去5年間における本試験（第1次試験）の出題実績です。

適宜、補足参考
など、補充的な解説を載せています。

巻末の「**出題領域表**」は、本書の章立てに合わせて出題論点を一覧表にしたものです。頻出の論点がひと目でわかります。

この3つの順で学習することで、本書を最大限に使いこなすことができます。

出題領域表

	H25	H26
第1章	費用関数 費用に関する諸概念 利潤最大化行動 供給曲線 課税の効果 生産関数によるアプローチ	限界費用と平均可变費用 利潤関数 生産関数
	費用関数 予算制約 利潤最大化 需要関数 需要の所得弾力性 需要の価格弾力性	予算制約線の切点と傾き 2財モデル（最適消費点・補助金の効果、フライバーバー効果） 最適消費点 上級財・下級財 需要の価格弾力性
	所得効果と代替効果 期待効用仮説 市場均衡 市場の調整過程 企業分析 バレート効率性	スルツキー分解（異時点間の消費・貯蓄理論） スルツキー分解 期待効用仮説 買い手への課税の効果 エッジワースボックス

中小企業診断士試験の概要



では続いて、皆さんが受験される、中小企業診断士の試験制度をみていきましょう。

中小企業診断士試験は、「第1次試験」と「第2次試験」の2段階で行われます。

第1次試験は、企業経営やコンサルティングに関する基本的な知識を問う試験であり、年齢や学歴などによる制限はなく、誰でも受験することができます。第1次試験に合格すると、第2次試験へと進みます。この第2次試験は、企業の問題点や改善点などに関して解答を行う記述式試験（筆記試験）と、面接試験（口述試験）で行われます。

それぞれの試験概要は、以下の通りです（平成29年度現在）。

第1次試験

【試験科目・形式】 7科目（8教科）・択一マークシート形式（四肢または五肢択一）

		試験科目	試験時間	配点
第1日目	午前	経済学・経済政策	60分	100点
		財務・会計	60分	100点
	午後	企業経営理論	90分	100点
		運営管理（オペレーション・マネジメント）	90分	100点
第2日目	午前	経営法務	60分	100点
		経営情報システム	60分	100点
	午後	中小企業経営・中小企業政策	90分	100点

※中小企業経営と中小企業政策は、90分間で両方の教科を解答します。

※公認会計士や税理士といった資格試験の合格者については、申請により試験科目の一部免除が認められています。

【受験資格】

年齢・性別・学歴による制限なし

【実施地区】

札幌・仙台・東京・名古屋・大阪・広島・福岡・那覇

【合格基準】

(1)総点数による基準

総点数の60%以上であって、かつ1科目でも満点の40%未満のないことを基準とし、試験委員会が相当と認めた得点比率とする。

(2)科目ごとによる基準

満点の60%を基準とし、試験委員会が相当と認めた得点比率とする。

※一部の科目のみに合格した場合には、翌年度及び翌々年度の、第1次試験受験の際に、申請により当該科目が免除されます（合格実績は最初の年を含めて、3年間有効となる）。

※最終的に、7科目すべての科目に合格すれば、第1次試験合格となり、第2次試験を受験することができます。

【試験案内・申込書類の配布期間、申込手続き】

例年5月中旬から6月上旬（平成29年度は5/2～5/31）

【試験日】 例年8月上旬の土日2日間（平成29年度は8/5・6）

【合格発表】 例年9月上旬（平成29年度は9/5）

【合格の有効期間】

第1次試験合格（全科目合格）の有効期間は2年間（翌年度まで）有効。

第1次試験合格までの、科目合格の有効期間は3年間（翌々年度まで）有効。

！ 第1次試験のポイント

①全7科目（8教科）を2日間で実施する試験である

②科目合格制が採られており基本的な受験スタイルとしては7科目一括合格を目指す、必ずしもそうでなくてもよい（ただし、科目合格には期限がある）

第2次試験《筆記試験》

【試験科目】 4科目・各設問15～200文字程度の記述式

試験科目		試験時間	配点
午前	中小企業の診断及び助言に関する実務の事例Ⅰ	80分	100点
	中小企業の診断及び助言に関する実務の事例Ⅱ	80分	100点
午後	中小企業の診断及び助言に関する実務の事例Ⅲ	80分	100点
	中小企業の診断及び助言に関する実務の事例Ⅳ	80分	100点

【受験資格】

第1次試験合格者

※第1次試験全科目合格年度とその翌年度に限り有効です。

※平成12年度以前の第1次試験合格者で、平成13年度以降の第2次試験を受験していない場合は、1回に限り有効です。

【実施地区】

札幌・仙台・東京・名古屋・大阪・広島・福岡

【試験案内・申込書類の配布期間、申込手続き】

例年8月下旬から9月中旬（平成29年度は8/25～9/19）

【試験日】 例年10月下旬の日曜日（平成29年度は10/22）

【合格発表】 例年12月上旬（平成29年度は12/8）

※筆記試験に合格すると、口述試験を受験することができます。

※口述試験を受ける資格は当該年度のみ有効です（翌年への持ち越しはできません）。

第2次試験《口述試験》

【試験科目】 筆記試験の出題内容をもとに4～5問出題（10分程度の面接）

【試験日】 例年12月中旬の日曜日（平成29年度は12/17）

【合格発表】 例年12月下旬（平成29年度は12/26）



第2次試験のポイント

- ①筆記試験と口述試験の2段階方式で行われる
- ②基本的な学習内容としては1次試験の延長線上にあるが、より実務的な事例による出題となる

【備考】実務補習について

中小企業診断士の登録に当たっては、第2次試験に合格後3年以内に、「診断実務に15日以上従事」するか、「実務補習を15日以上受ける」ことが必要となります。

この診断実務への従事、または実務補習を修了し、経済産業省に登録申請することで、中小企業診断士として登録証の交付を受けることができます。

中小企業診断士試験に関するお問合せは

一般社団法人 中小企業診断協会（試験係）

〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-11 銀松ビル5階

ホームページ <http://www.j-smeca.jp/>

TEL 03-3563-0851 FAX 03-3567-5927

スタート



本書

はじめての一步

合格への第一歩となる書籍です。「オリエンテーション編」では、試験の概要や科目ごとの特徴、学習プランなど、合格までがイメージできる情報を掲載。「入門講義編」では、診断士試験7科目の代表的論点を説明しています。フルカラーの豊富なイラスト、板書で、スイスイ学習が進みます。



反復

スピードテキスト (全7冊)

本格的な学習の基本となる科目別のテキストです。TAC中小企業診断士講座の講師陣が、合格に必要な知識に絞って執筆しています。理解を助ける豊富な図表・イラストや、過去5年分の1次試験出題表示入り。2次試験まで使用できます。スピード問題集と併用することで、知識がどんどん定着します。



スピード問題集 (全7冊)

スピードテキストに準拠した科目別のオリジナル問題集です。本試験問題と同じ形式ですが、本試験より少しやさしめの問題で構成しています。各問題の解説にテキストの該当箇所を表示しているため、テキストと問題集の反復学習に最適です。

〈出題形式の確認としても〉



第1次試験 過去問題集 (全7冊)

過去5年分の本試験問題と丁寧な解説を収載した科目別過去問題集です。「重要」「参考」のマークで、メリハリをつけた学習が可能です。学習初期から、本試験ではどんな論点がどんな形で出題されるのかを確認しながら、学習を進めるのが効果的です。



TAC出版では、学習段階に応じてさまざまなアイテムを用意しています。
本書での学習と併せてぜひご活用いただき、最速合格を目指してください！

第1次試験

第2次試験

〈試験直前までの復習に〉



要点整理 ポケットブック (全2冊)

第1次試験の試験日程と同じ科目順の要点整理本です。試験直前の知識の確認にも便利な赤シートつき。ポケットサイズで、電車の中や空き時間などを利用した復習に便利です。同内容のPDF版もあります（ご購入はTAC出版書籍販売サイト「Cyber Book Store」より）。

〈弱点補強〉



集中特訓 財務・会計

苦手な方も多い財務・会計について、得点源にできるまで実力を飛躍的に向上させるためのトレーニング本です。TACの模試・答練で使った良問をベースにしており、基礎レベルから2次試験レベルまでの各段階に応じた演習が可能です。

〈対応力強化〉



集中特訓 診断士第2次試験

第1次試験と比較して出題範囲が広く、対策が取りにくい第2次試験を克服するためのトレーニング本です。本試験と同じ4つの事例を4回分、計16問を収載。本書でのトレーニングにより2次試験への対応力がぐんとアップします。



第2次試験 過去問題集

過去5年分の本試験問題を収載。問題本文の読み取りかたから答案作成までの手順を丁寧に解説しています。巻末には、口述試験の問題例も収載。抜き取り可能な解答用紙つきです（「Cyber Book Store」にて解答用紙ダウンロードサービスもご利用いただけます）。



経済学・経済政策を学習するにあたってのポイント



本格的な学習を始める前に、これから何について学ぶのか、どんなことを意識して学習するのがよいのかなど、いくつかのポイントについて説明します。

①経済学とは何か

経済学とは、ひと言で言えば、「世の中の経済事象をできるだけ単純化したモデルでとらえる学問」です。そしてその基本的な考え方は、「市場の売り手と買い手に任せておけば、うまく社会的利益を実現することができる」というものです（ただし市場システムに任せておいては上手くいかないケースもあります）。

物価、利子率、貨幣供給、貨幣需要、消費、投資、政府支出、為替レート、技術革新、投機的行動、天災、政権交代など、実際の経済事象は実にさまざまな要素が複雑に絡み合って成立します。しかしながら、あまりに多くの要素を考慮すると、適切な因果関係を把握できなくなり、いつまでたってもモデルにすることができません。

そこで経済学では「他の要素は変わらないという前提のもとで、〇〇と××の関係に注目するとどうなるのか（例：〇〇が増えると××はどうなるのか）」といったように、前提や仮定を置いて議論を進めることになります。

<前提の例>

- ・企業や消費者は自らの利潤が最大化するように行動する。

実際には企業や消費者の考え方はさまざまですが、それをいちいち考慮している企業行動や消費者行動はモデル化できません。よって、最も多いと想定される「自らの利潤を最大化する（特に経済的利潤を最大化する）ように行動する」主体として、企業や消費者をとらえます。

- ・情報の完全性が成立する。

つまり、売り手、買い手とも価格情報などをよく知っているということです。企業経営理論で学習した経済人モデルをイメージしてみてください。よって、相場（均衡価格）よりも1円でも高い売り手からは誰も買わないといった事態も起こり得ます。

- ・市場には需要と供給が存在し、均衡（需要と供給のバランスがとれること）する。

基本的にはどのような市場（財・サービス、労働、貨幣、為替など）においても、需要と供給が存在すると思ってください。また上記のとおり、経済人モデル

(最適な選択をできる人間観) が前提ですので、需要と供給の調整は速やかに行われ、たとえば売れ残りといった事態は(少なくとも長期的には) 生じ得ないということになります。実際にはなかなかそのようにうまくはいかないのですが、経済人モデルを前提にしているがゆえのこととして了解ください。

②数式やグラフを利用してモデル化する

経済学の他科目とは異なる特徴として、数式やグラフの存在があげられ、このことが初学者にとって心理的なハードルとなることが多いようです。ある値 (x) に対して、ただ1つの値 (y) が対応するような関係があるとき、この関係を関数といい、 $y = f(x)$ などと表します。

【例】費用関数：生産量(供給量)と総費用との関係を表す。つまり「ある生産量のとき、総費用(C)はいくらになるか」を求めるもの。

$$C(x) = x^3 - x^2 + 2x + 8$$

モデル化するためには、関数は不可欠です。また、グラフは関数を図示したものになります。モデルの内容を理解するためには、関数は必須ではありませんが、グラフの読み取りは必須です。

③グラフの読み取りに注意する

グラフは互いに関係のある2つ以上の数量を直線や曲線などの図で表現したものです。経済学ではグラフによるモデルが多数出てきますが、その読み取りの際には以下の点を確認してください。

- ① 曲線(経済学ではグラフ上は直線で描かれていても曲線と表現する場合があります)が何と何の関係を表しているのか。
- ② 横軸と縦軸はそれぞれ何を表しているのか。
- ③ グラフからどのようなこと(結論)が読み取れるのか。

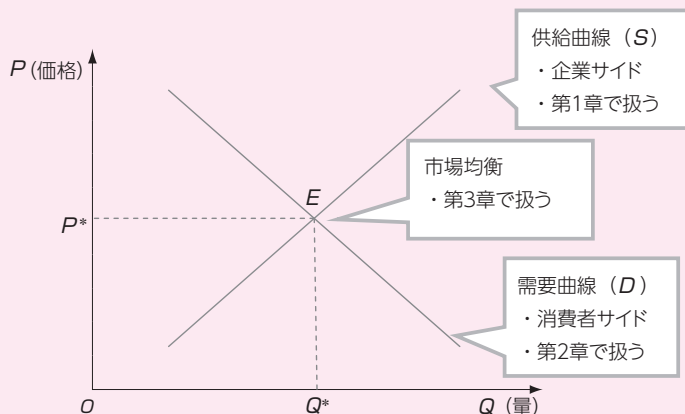
グラフに慣れるためには、テキストに記載されているグラフを、グラフの導出過程をふまえながら自分で書いてみるということが非常に有効です。

④経済学の学習内容

大きくミクロ経済学(1企業、1消費者、そしてその集合である1つの市場について主に扱う)と、マクロ経済学(一国全体の経済活動を扱う)に分かれます。

ミクロ経済学について、テキストで学習するのは古典派とよばれる人たちの考え方で、「市場メカニズムに任せておけば上手くいく」というのが基本的な考え方です。

<ミクロ経済学の概要>



一方、マクロ経済学では財（モノ）市場、資産（貨幣）市場、生産要素（労働）市場、そして為替市場について、一国全体の経済活動を扱います。またマクロ経済学の目的は、「分析結果を一国全体の経済活動に活かすこと」、換言すれば「いかにして景気を良くして国民所得（GDP）を成長させるか」ということになります。テレビのニュースや新聞等で報じられている政府や日本銀行の政策に、少しでも目を向けるとそれだけ興味が湧くでしょう。

⑤結論を優先した学習

一般の経済学のテキストでは、結論に至る導出過程に多くのスペースを割いています（本書も同様です）。一方、問題を解くためには結論を知っていなければいけません。導出過程をふまえることでそれだけモデルの理解や定着につながり、応用力を高めることもできます。よって、まずはボックスや太字で示されている結論を押さえてから導出過程を追ったほうが効率的に学習することができます。

❗ 次のページで、科目全体の体系図を見てみましょう。

経済学・経済政策 体系図

<ミクロ経済学の概要>

第1章～第3章

<前提>

完全競争市場において社会的総余剰は最大化
(市場の効率的な資源配分が実現)



市場メカニズムでは効率的な資源配分が実現しないケース
(市場の失敗)

- (1) 不完全競争市場
(独占市場・寡占市場・独占的競争市場)
- (2) 外部効果の存在
- (3) 公共財の存在
- (4) 情報の不完全性

第4章

第5章

<市場の需要と供給>

第1章

P(価格)

均衡価格

均衡取引量

Q(数量)

供給曲線
(企業サイド)

- ・ 費用関数
- ・ 利潤最大化条件
- ・ 損益分岐点と操業停止点

需要曲線
(消費者サイド)

第2章

- ・ 予算制約線
- ・ 無差別曲線
- ↓
- ・ 最適消費点

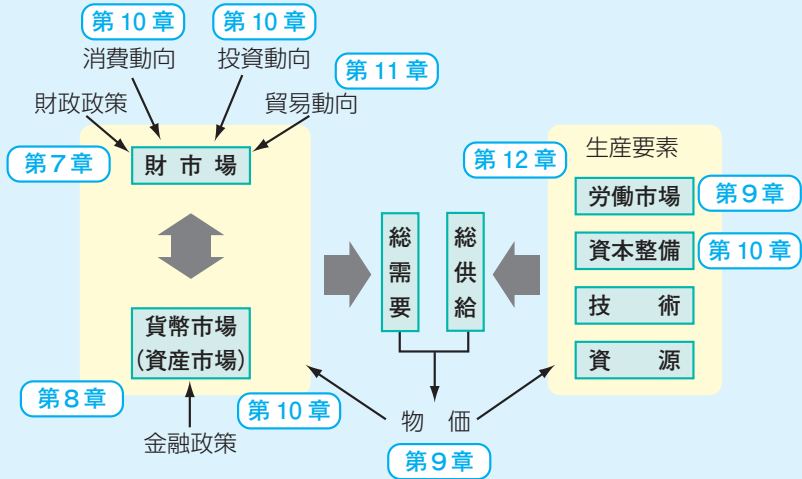
市場全体の需要と供給により
均衡価格と均衡取引量が決定

市場全体の社会的総余剰
の決定 (余剰分析)

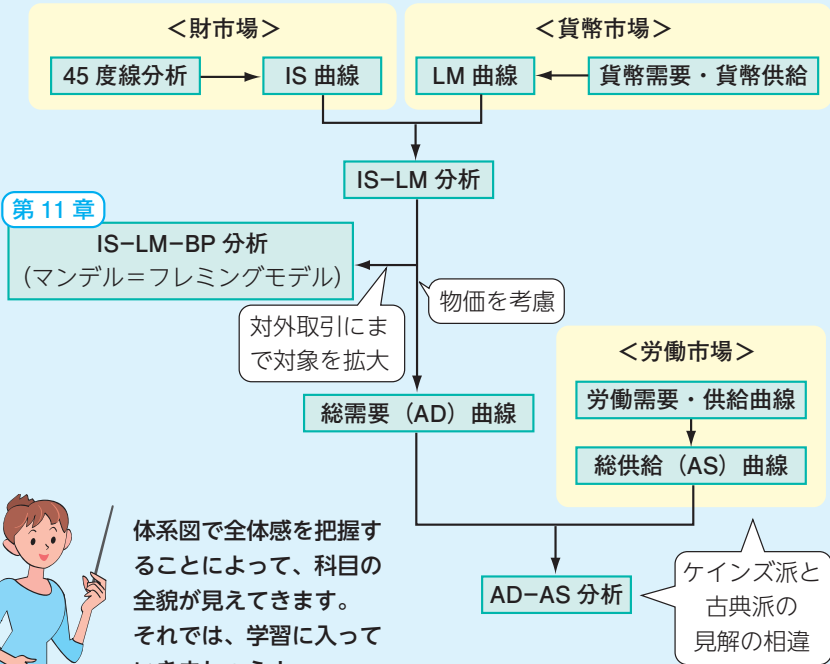
第3章

余剰分析の対象を国際貿易にまで拡大

<マクロ経済学の概観>



<分析の流れ> 第7章～第9章



体系図で全体感を把握することによって、科目の全貌が見えてきます。それでは、学習に入っていきます！

C O N T E N T S

第1章 企業行動の分析

1	費用関数	3
1	1 費用の分類	3
2	2 費用関数の形状	4
2	費用に関する諸概念	8
1	1 平均費用	8
2	2 平均可変費用	12
3	3 限界費用	15
3	利潤最大化行動	22
1	1 価格受容者	22
2	2 利潤最大化	23
3	3 損益分岐点と操業停止点	27
4	供給関数	34
1	1 供給関数	34
2	2 供給の価格弾力性	36
5	課税の効果	39
1	1 課税の種類	39
2	2 従量税の効果	39
3	3 従価税の効果	42
4	4 定額税の効果	44
6	生産関数によるアプローチ	45
1	1 生産関数	45

第2章 消費者行動の分析

1	効用関数	53
1	1 効用と選好	53
2	2 効用関数	54
3	3 無差別曲線	55
4	4 限界代替率	57
2	予算制約	61
1	1 予算制約線と予算集合	61
3	効用最大化	64
1	1 最適消費点	64
4	需要関数	66

1	個人の需要関数	66
2	市場全体の需要曲線	68
5	需要の所得弾力性	69
1	需要の所得弾力性	69
2	上級財、下級財、中立財	69
3	所得消費曲線	70
6	需要の価格弾力性	73
1	需要の価格弾力性	73
2	代替財と補完財	76
3	ギッフェン財	77
7	所得効果と代替効果	78
1	スルツキー分解（所得効果と代替効果）	78
2	ギッフェン財	83
8	期待効用仮説	88
1	危険回避的、危険愛好的	88
2	期待効用仮説	89

第3章 市場均衡と厚生分析

1	市場均衡	95
1	完全競争市場と市場均衡	95
2	需要、供給曲線のシフトによる均衡の変化	96
2	市場の調整過程	99
1	ワルラス的調整過程	99
2	マーシャル的調整過程	100
3	市場の不安定	101
3	余剰分析	103
1	消費者余剰	103
2	生産者余剰	105
3	社会的総余剰	108
4	政府の政策と社会的総余剰	109
4	パレート効率性	117
1	パレート効率性（最適性）	117
5	国際貿易	119
1	比較生産費説	119
6	自由貿易の理論	125
1	自由貿易均衡と自由貿易の利益	125
2	関税政策の効果	128

第4章 不完全競争

1	不完全競争市場	135
1	1 不完全競争市場	135
2	独占市場	136
1	1 独占市場	136
2	2 独占均衡	136
3	寡占	146
1	1 寡占市場	146
2	2 代表的な寡占モデル	147
3	3 クールノー均衡	147
4	4 協調的行動（カルテル）	149
5	5 屈折需要曲線	154
4	独占的競争	159
1	1 製品差別化	159
2	2 独占的競争	159

第5章 市場の失敗と政府の役割

1	市場機構の長所と市場の失敗	165
1	1 市場機構の長所	165
2	2 市場の失敗	165
2	外部効果	167
1	1 外部効果	167
2	2 厚生損失	167
3	3 外部性の是正手段	170
3	公共財の供給	176
1	1 公共財	176
4	情報の不完全性	178
1	1 情報の不完全性	178
2	2 性質に関する情報の非対称性	178
3	3 行動に関する情報の非対称性	181
5	費用逕減産業	184
1	1 費用逕減産業	184
2	2 費用逕減産業への規制	184
3	3 限界費用価格規制と平均費用価格規制	185
4	4 公共サービス料金設定に対する規制	188

第6章 国民経済計算と主要経済指標

1	GDP（国内総生産）	193
1	1 GDP（国内総生産）	193
2	2 GNP（国民総生産）	194
3	3 三面等価の原則	195
4	4 帰属計算	198
5	5 産業連関表	198
2	2 物価指数	201
1	1 物価指数の作成	201
2	2 GDP デフレーター	203
3	3 インフレーションとデフレーション	204
3	3 景気動向指数	207
1	1 景気動向指数	207

第7章 財市場の分析

1	1 財市場	211
1	1 マクロ経済学を学習するにあたっての基本的な考え方	211
2	2 財市場の分析を学習するにあたっての基本的な考え方	213
2	2 古典派とケインズ派	214
1	1 古典派とケインズ派の主な違い	214
2	2 財政政策と金融政策	214
3	3 消費	215
3	3 均衡国民所得の決定（閉鎖経済、政府部門・定額租税を考慮するケース）	218
1	1 総需要	218
2	2 総供給	219
3	3 均衡国民所得の決定	219
4	4 乗数理論	222
1	1 乗数理論	222
5	5 需給ギャップ	230
1	1 完全雇用国民所得	230
2	2 デフレギャップ	231
3	3 インフレギャップ	231
6	6 IS 曲線	234
1	1 投資関数	234
2	2 IS 曲線	236

第8章 貨幣市場とIS-LM分析

1	貨幣供給	245
1	① 信用創造	245
2	② 金融政策	248
2	貨幣需要	251
1	① 貨幣需要の分類	251
2	② 資産選択	251
3	③ 貨幣需要曲線	254
3	LM 曲線	257
1	① LM 曲線	257
4	IS-LM 分析	264
1	① IS-LM 分析	264

第9章 雇用と物価水準

1	AD 曲線（総需要曲線）	277
1	① AD 曲線（総需要曲線）	277
2	労働市場と AS 曲線（総供給曲線）	282
1	① 労働市場	282
2	② AS 曲線（総供給曲線）	285
3	AD-AS 分析	288
1	① 均衡国民所得の決定	288
2	② 政策の効果	288
3	③ インフレーションの種類	289
4	失 業	291
1	① 失 業	291
2	② フィリップス曲線	291
3	③ オークンの法則	296

第10章 消費、投資、財政・金融政策に関する理論

1	消費に関する理論	299
1	① 消費の三大仮説	299
2	② 消費の外部効果	300
2	投資に関する理論	302
1	① 加速度原理	302
2	② トービンの q 理論	303
3	③ 新古典派の投資理論	304
3	財政政策に関する理論	306

① リカード＝バローの等価定理	306
4 金融政策に関する理論	308
① 貨幣数量式	308
② ケンブリッジ方程式	308

第11章 国際マクロ経済学

1 為替レート	313
① 為替レートについての基本的な考え方	313
② 為替レートの決定理論	314
2 国際収支	318
① 国際収支	318
② 経常収支の決定理論	319
3 マンデル＝フレミングモデル	324
① BP 曲線	324
② マンデル＝フレミングモデル	325

第12章 景気循環と経済成長

1 景気循環と経済成長	333
① 日本の経済動向	334
2 景気循環／経済成長に関する理論	335
① リアルビジネスサイクル理論	335
② 成長会計	336
③ 内生的経済成長理論	336

出題領域表	338
-------------	-----

参考文献一覧	344
--------------	-----

索引	345
----------	-----

第1章

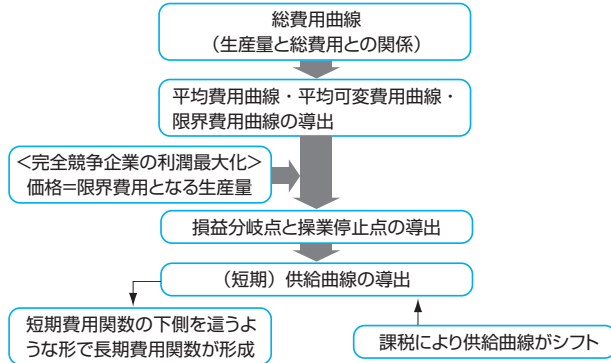
企業行動の分析

Registered Management Consultant

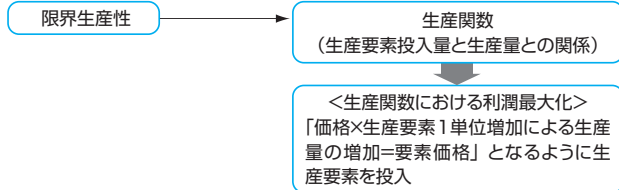
本章の 体系図

完全競争市場における企業行動

●費用関数による利潤最大化⇒供給関数の導出



●生産関数による利潤最大化



！ 本章のポイント

- ◇ 逆S字型の費用曲線と収入曲線が与えられた場合、ある特定の生産量の場合の、総費用、固定費用、可変費用、収入、利潤はどこに相当するか。
- ◇ 費用曲線を所与として平均費用、平均可変費用、限界費用が最低となる生産量はどこか。
- ◇ 費用曲線と収入曲線を所与として、もしくは限界収入曲線と限界費用曲線を所与として、どの生産量で利潤が最大化するか。
- ◇ 平均費用曲線、平均可変費用曲線、限界費用曲線を所与として、損益分岐点、あるいは操業停止点はどこか。
- ◇ 各課税によって供給曲線がどのようにシフトするか。
- ◇ 収穫逓減あるいは収穫増の生産関数はどのような形状になるか。

1 費用関数

費用関数とは、生産量（＝供給量）と費用の関係を表す関数である。費用関数を図で示したものが費用曲線である。利潤は、収入と費用の差として定義されるため、利潤最大化行動を考察するには、まず企業の費用面を定式化する必要がある。なお、ある値 x に対して、ただ 1 つの値 y が対応するような関係があるとき、この関係を関数といい、「 $y=f(x)$ 」などと表す。総費用 (C) を表す関数（費用関数）は、 $C=x^3-2x^2+6x+10$ といったような 3 次関数で表されることが一般的である。

1 費用の分類

財・サービスの生産における総費用 (C) は、以下のように分けて考えることができる。

①▶ 可変費用と固定費用

可変費用 (variable cost : $VC(x)$) → 生産量 (x) に依存し、変化する費用
 固定費用 (fixed cost : FC) → 生産量に依存しない費用

例 可変費用 → 原材料や従業員への出来高払いなど
 固定費用 → 機械などの設備やオフィス賃借料、光熱費など

②▶ サunkコスト

固定費用は「サunk」されている（回収不能である）か否かで、さらに区別される。

固定費用がサunkされている → 固定費用が回収不可能であること

例 自動車を生産している企業が、自動車の生産に必要な工作機械を購入した。
 その工作機械が中古市場で売却可能 → サunkされていない
 売却不可能 → サunkされている

サunkされている固定費用をサunkコスト（あるいは、埋没費用）とよぶ。固定費用がサunkされないような産業には、一度参入しても退出（撤退）する際に固定費用は回収可能である。よって、そのような産業においては、参入・退出がより容易に行われ、その結果、競争が激しくなると考えられている。以下では、固定費用はつねにサunkされているものとする。

H29 22

2 費用関数の形状

ここでは、生産量と総費用の関係を表す費用関数 $C(x)$ の形状（費用曲線）を考える。

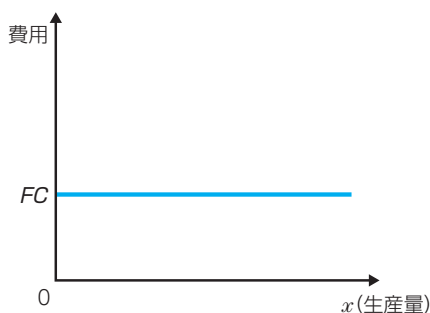
$$\text{総費用 } C(x) = \text{可変費用 } VC(x) + \text{固定費用 } FC$$

したがって、総費用を求めるには、まずその構成要素である可変費用と固定費用をそれぞれ求める必要がある。

1▶ 固定費用関数の形状

固定費用は生産量に依存しない費用であるので、固定費用関数 FC は、図表1-1のように水平な直線で表すことができる。

図表 [1-1]



※なお、経済学では直線で示されているものもすべて「曲線」と表現する。上記の場合は固定費用曲線という。

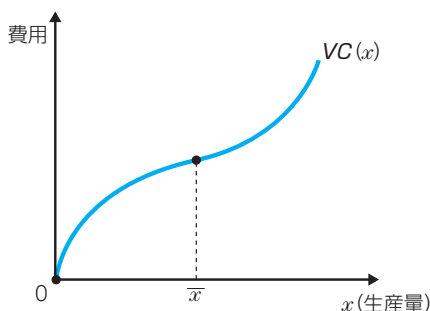
2▶ 可変費用関数の形状

一方、可変費用関数 $VC(x)$ は、以下のような仮定のもとで、図表1-2のような逆S字型の形状をもつと想定される。

【仮定】

- 生産量が少ない (\bar{x} より左) ➡ 1単位の生産量の上昇に対する費用の上昇が逓減
- 生産量が多い (\bar{x} より右) ➡ 1単位の生産量の上昇に対する費用の上昇が逓増

図表 [1-2]



参 考

図表1-2の逆S字はあくまでも仮定であるため、他のケースについて深く考える必要はない。以下に、逆S字になり得るであろう一般論を記載しておく。

初期（生産量が少ない）：従業員の能力が低く機械も十分に使いこなせていないが、徐々に経験を積むことで効率性が増し、生産量1単位あたりに対する追加的な費用は少なくなっていく。

後期（生産量が多い）：従業員の能力も十分で機械もフル稼働であるため、従業員を追加しても生産量の増加の余地は少なく、生産量の増加率より費用の増加率のほうが高い。

※生産量と費用との組合せは無数にあると考えられるため、図表のように両者の組合せは線で表される。

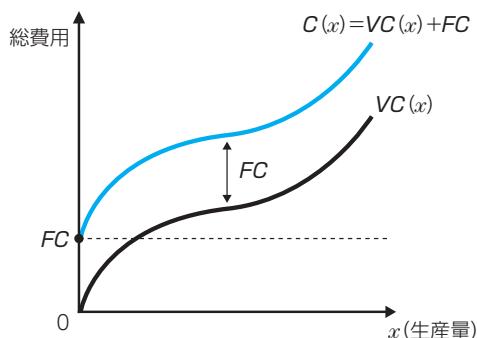
3 ▶ 費用関数（曲線）

H29 14

費用関数は、 $C(x) = VC(x) + FC$ であった。よって、費用曲線は、図表1-3のように、可変費用曲線を固定費用分だけ上側にシフトさせることで導出できる。

数値例

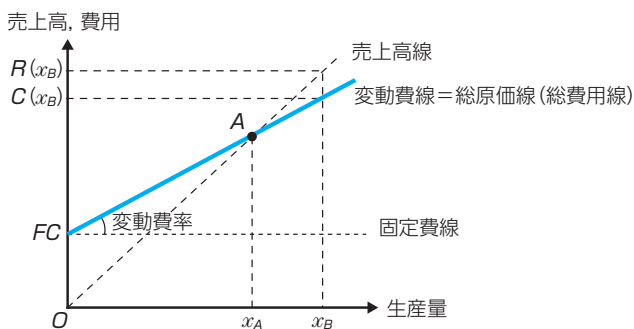
仮に可変費用関数を $VC(x) = x^3 - 2x^2 + 2x$ 、固定費用を $FC = 8$ とすると、費用関数は、 $C(x) = VC(x) + FC = x^3 - 2x^2 + 2x + 8$ となる。 x （生産量）が2の場合、総費用は12となる。



● 考え方のヒント

費用関数を考える場合に、「財務・会計」で学習する損益分岐図表を思い浮かべると理解しやすい。

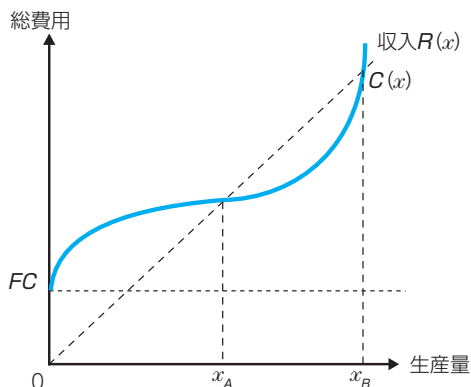
損益分岐図表とは、固定費と売上高に対する一定の変動費率を費用構造としてもつ企業の売上高と固定費、変動費、総原価をグラフに表したものである。



この損益分岐図表では、変動費が生産量に比例して増加すると仮定されているため、総費用線が右上がりの直線となっている。

生産量が x_B のとき、売上高は $R(x_B)$ 、総費用は $C(x_B)$ 、固定費は FC 、変動費は $C(x_B) - FC$ 、利益は $R(x_B) - C(x_B)$ に相当する。生産量が x_A のとき、売上高と総費用の値が一致し（利益はゼロ）、点Aを損益分岐点という。

しかしながら、ミクロ経済学で費用関数を考える場合には、可変費用関数の形状を逆S字型と仮定するため、次のようなものとなる。



生産量に対する収入（売上高）、固定費用（固定費）、変動費用（変動費）、利潤（利益）、損益分岐点の求め方は同様である。

2つのグラフの相違は、費用の仮定が異なることに起因する。また、この相違が「利潤を最大化する生産量を特定できるかどうか」ということにつながっている。

総費用線が直線であれば、生産量が拡大するほど利益が拡大するため、利潤最大化のためには、生産量を極大化することになる。一方、総費用線が曲線の場合には、生産量が過度に拡大すると加速度的に費用が増加し、生産量が x_B 以上になると利潤がマイナスになってしまうことから、利潤最大化のために、適正な生産量を決定することになる。

2

費用に関する諸概念

本節では費用に関するいくつかの概念を学習する。特に「平均費用」「平均可変費用」「限界費用」は、次節で扱う企業の利潤最大化行動を考察するための必須の概念である。

1 平均費用



① 平均費用の定義

平均費用

(average cost : $AC(x)$)



生産物 1 単位あたりの費用

総費用を生産量で割ったものに等しい

つまり、生産量 x における平均費用 $AC(x)$ は

$$AC(x) = \frac{\text{総費用}}{\text{生産量}} = \frac{C(x)}{x} = \frac{VC(x)}{x} + \frac{FC}{x}$$

である。

数値例

費用関数を $C(x) = x^3 - 2x^2 + 2x + 8$ とすると、平均費用は

$$AC(x) = \frac{C(x)}{x} = x^2 - 2x + 2 + \frac{8}{x}$$

となる。

② 平均費用曲線の導出

ここで、図表1-4(a)における生産量 x_A を考える。 x_A に対応する費用曲線上の点を A とおく。このとき、 x_A における平均費用 $AC(x_A)$ は直線 OA の傾き $= \angle A$ で与えられる。これは、

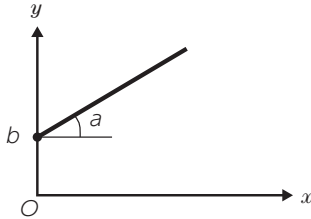
$$OA \text{ の傾き} = \frac{A \text{ の高さ}}{x_A} = \frac{C(x_A)}{x_A} = AC(x_A)$$

となっているためである。さらに、このように求めた $AC(x_A)$ を図表1-4(b)に a 点としてプロットする。以上の手順をすべての生産量に対して行うことで、平均費用曲線が図表1-4(b)のように導出できる。図表1-4(a)のような逆S字型の費用曲線の場合には、平均費用曲線はU字型になる。これを **U字型平均費用曲線** という。

● 考え方のヒント

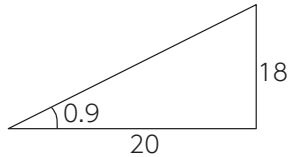
$Y=aX+b$ という1次関数が与えられたとき、 a を傾き、 b を切片という。傾きは「タテの変化÷ヨコの変化」で求めることができる。

$$\text{傾き} = \frac{\text{タテの変化}}{\text{ヨコの変化}} = \frac{\Delta Y}{\Delta X}$$

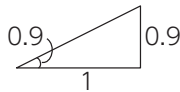


傾きとは、「ヨコ方向に1進んだとき、どれくらいタテ方向に進むのか」を表している。

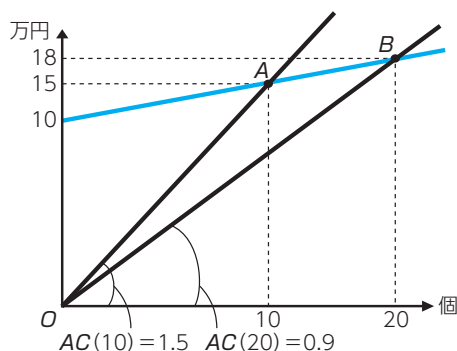
例



この傾きは $\frac{18}{20}=0.9$ となる。この場合、常にヨコ方向に1進むとタテ方向に0.9進むことになるので、平均してヨコ方向に1進むとタテ方向に0.9進むということもできる。



次に縦軸に総費用、横軸に供給量（生産量）をとったケースを考える。イメージしやすくするために、費用曲線を直線として考える。



$$\text{直線OAの傾き} = \frac{15}{10} = 1.5$$

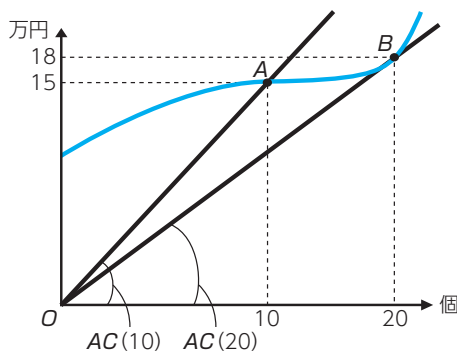
$$\text{直線OBの傾き} = \frac{18}{20} = 0.9$$

一方、点A（生産量10個）のときの平均費用は1.5万円（ $\frac{15}{10}$ より）となり、点B（生産量20個）のときの平均費用は0.9万円（ $\frac{18}{20}$ より）となる。

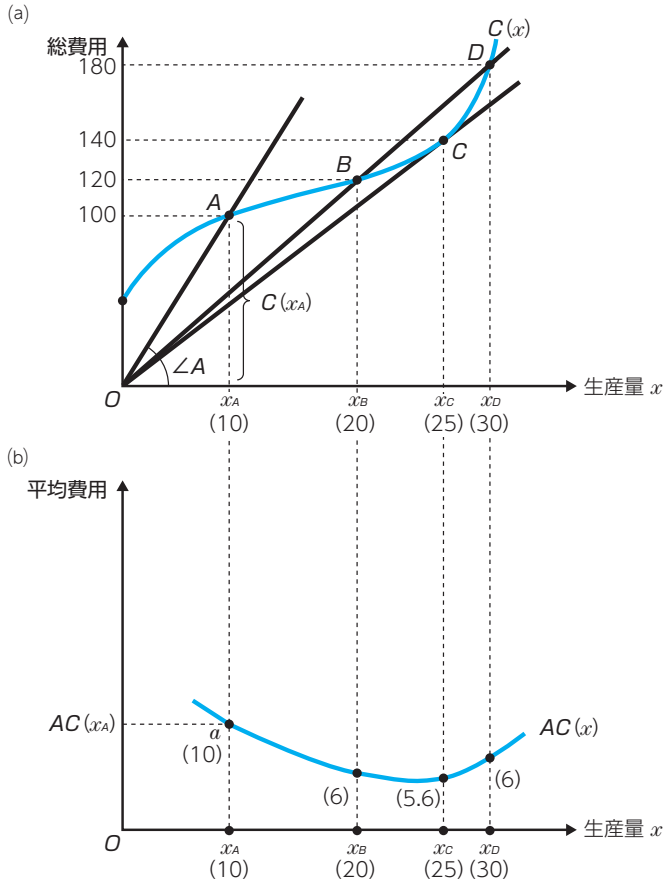
平均費用も「タテの変化÷ヨコの変化」で求めるため、平均費用は傾きで表されることになる。

すなわち**平均費用＝原点と総費用曲線上の各点を結んだ直線の傾き（の大きさ）で表される**。たとえば、点Aにおける平均費用（生産量10個のときの平均費用）＝直線OAの傾きの大きさになる。

なお、このことは費用曲線がS字型のカーブを描く場合でも同様である。



図表 [1-4]



※ x 軸と y 軸の数値はあくまで例である。

- 平均費用は原点とグラフ上の各点を結んだ直線の傾きで求めることができる。
- 原点を通る直線と費用曲線との接点 (点C) において平均費用は最小化する。

H29 14

H27 15

③ ▶ 規模の経済

生産量の増加とともに平均費用が低下するとき、**規模の経済**が働いている、あるいは**収穫逓増**という。逆に、**平均費用が増加**するとき、**規模の不経済**が働いている、あるいは**収穫逓減**という。

平均費用曲線が右下がり → 規模の経済が働いている、あるいは収穫逓増
 平均費用曲線が右上がり → 規模の不経済が働いている、あるいは収穫逓減

図表1-4(b)では、 x_c より左では規模の経済、右では規模の不経済が働いている。

2 平均可変費用



1 ▶ 平均可変費用の定義

平均可変費用

(average variable cost : $AVC(x)$)



生産物 1 単位あたりの可変費用
 可変費用を生産量で割ったもの
 $\frac{VC(x)}{x}$ に等しい

H25 16

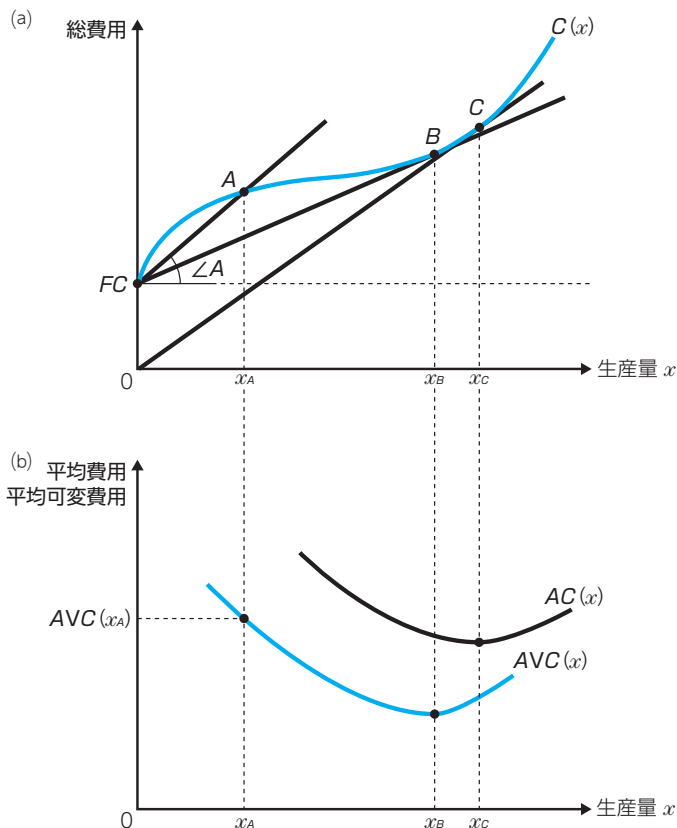
数値例

可変費用を $VC(x) = x^3 - 2x^2 + 2x$ とすると、平均可変費用は $AVC(x) = \frac{VC(x)}{x} = x^2 - 2x + 2$ となる。

2 ▶ 平均可変費用曲線の導出

平均可変費用曲線の描き方は、平均費用曲線の場合と基本的に同じである。ただし、平均可変費用曲線の場合には、費用曲線のかわりに可変費用曲線を基にする。図表1-5(a)には費用曲線が描かれているが、縦軸切片の FC を原点と考えれば、可変費用関数とみなせる。たとえば、生産量 x_A における平均可変費用 $AVC(x_A)$ は、 A 点と FC を結んだ直線の傾き $\angle A$ で与えられる。

図表 [1-5]



- 平均可変費用は FC (費用関数の切片) とグラフ上の各点とを結んだ直線の傾きで求めることができる。
- FC を通る直線と費用曲線との接点(点 B)において平均可変費用は最小化する。

H29 14

H27 15

③▶ 平均費用と平均可変費用の関係.....

1 平均費用 > 平均可変費用

平均費用は総費用(可変費用+固定費用)を生産量で割ったものであり、平均可変費用は可変費用のみを生産量で割ったものである。固定費用が存在する場合には、どんな生産量を考えても必ず総費用のほうが可変費用よりも大きいので、**平均費用 > 平均可変費用**が成り立つ。

※平均費用（AC）と平均可変費用（AVC）の差は平均固定費用（固定費用を生産量で割ったもの）にあたる。

数式による確認

$$AC(x) = \frac{C(x)}{x} = \frac{VC(x) + FC}{x} > \frac{VC(x)}{x} = AVC(x)$$

$$TC = FC + VC$$

両辺を生産量で割ると

$$AC = AFC + AVC$$

FC（あるいはAFC）は必ずプラスの値をとるので必ず $AC > AVC$ となる。

※ TC =総費用、 AFC =平均固定費用

H27 15

2 平均費用を最小化する生産量は、平均可変費用を最小化する生産量より大きい

両曲線の導出の方法からわかるように、平均費用を最小化する生産量は原点を通る直線と費用曲線の接点Cで決まり、平均可変費用を最小化する生産量はFCを通る直線と費用曲線の接点Bで決まる。図表1-5から明らかなように、必ずC点がB点より右側にくるため、**2** が成り立つ。

設 例

完全競争下で操業する企業の費用関数が次のように示されている。ここで、 TC は総費用を、 x は生産量を表す。

$$TC = 224 + 6x - 2x^2 + x^3$$

この企業の平均可変費用関数を求めよ。

[H25-16改題]

解 答

可変費用とは、費用の中で生産量 x に依存する部分のことである。費用関数が

$$TC = 224 + 6x - 2x^2 + x^3$$

で与えられているので、可変費用 VC は

$$VC = 6x - 2x^2 + x^3$$

である。平均可変費用 AVC は生産物1単位あたりの可変費用なので、可変費用を生産量（ x ）で割ることで求められる。

$$AVC = 6 - 2x + x^2$$

3 限界費用



1 ▶ 限界費用の定義

限界費用

(marginal cost : $MC(x)$)

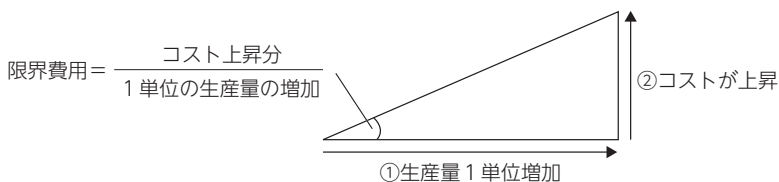
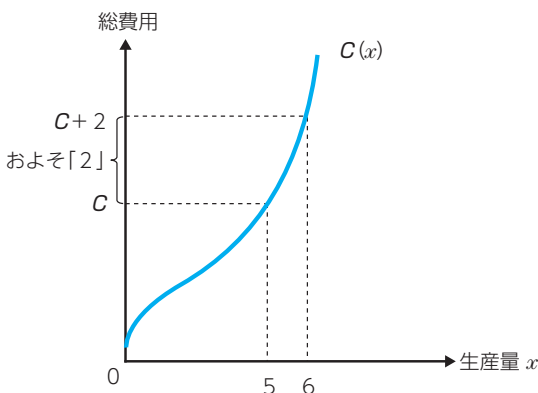


生産量を 1 単位増加させたときに

追加的に発生する費用 (費用の増加分)

例 生産量が 5 のとき限界費用が 2 とする (つまり、 $MC(5) = 2$)。これは生産量を 5 から 6 に 1 単位増加させたときに追加的におよそ 2 の費用がかかるということである。

図表 [1-6]



● 考え方のヒント

生産量が 5 個の場合の総費用が 5 万円、生産量が 6 個の場合の総費用が 7 万円であるとする。生産量にかかわらず固定費用は 3 万円生じるものとする。

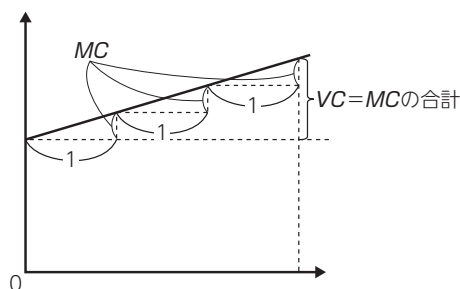
	5 個	6 個
総費用	5 万円	7 万円
固定費用	3 万円	3 万円
可変費用	2 万円	4 万円

2 万円上昇

生産量が5個のときの限界費用は2万円である（7万円－5万円）。この場合の限界費用は、生産量が5個から6個に増加したことによる総費用の上昇分であるが、それではなぜ2万円の総費用の上昇（つまり2万円の限界費用）が生じたのか考えてほしい。

図表をみれば、可変費用が2万円上昇した結果、総費用が2万円上昇したことがわかる。つまり**限界費用とは、可変費用の上昇分である**ととらえることができる。

なお、**可変費用とは生産量1単位増加するたびに生じる限界費用の合計**であるととらえることもできる。単純化のために費用曲線を直線で考えてみるとわかりやすいだろう。



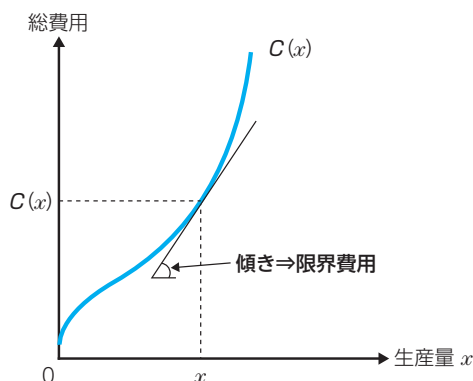
図による表現

H29 14

ある生産量 x における限界費用は、 x に対応する費用曲線上の点での接線の傾きで求められる。

H27 15

図表 [1-7]



微分による表現

接線の傾きは微分を行うことで求められるため、数学的には限界費用は費用関数を生産量で微分したものに等しい。つまり、

$$MC(x) = C'(x) = \text{費用曲線への接線の傾き}$$

H25 16

である。

数値例

費用関数を $C(x) = x^3 - 2x^2 + 2x + 8$ とすると、限界費用は

$$MC(x) = C'(x) = 3x^2 - 4x + 2$$

となる。

● 考え方のヒント

■ 限界概念

経済学には「限界費用」「限界生産性」「限界効用」など「限界」という接頭辞のつく用語が頻繁に出てくる。経済学での「限界」という用語は、英語の marginal の訳語であり、ある変数が追加的に 1 単位増加したときに、別の変数がどれだけ変化するか（図でいうと、ヨコ軸の値が 1 増加したときに、タテ軸の値がどれくらい変化するか）ということを表す概念として使われる（「限界 = limit」という用語とはまったく意味が違うことに注意してほしい）。

例

限界費用：生産量を 1 単位増加させたときの費用の増加分

限界生産性：生産要素の投入量を 1 単位増加させたときの生産量の増加分

限界効用：消費量を 1 単位増加させたときの効用の増加分

限界収入：生産・販売量 1 単位の増加がもたらす収入の増加分
(完全競争市場の場合は、市場価格に等しい)

■ 微分

簡単にいえば、関数 $f(x)$ の微分とは、関数 $f(x)$ への接線の傾きを求める演算のことである。微分は

$$f'(x)、あるいは \frac{df(x)}{dx}$$

と書く。

費用関数 $C(x)$ を例にとれば、 $C'(x_0)$ の値は費用曲線の x_0 における接線の傾きに等しい（19ページの図表を参照）。費用曲線の接線の傾きは、生産量を 1 単位増加させたときの、費用の増分（つまり、限界費用）に近似的には等しい。

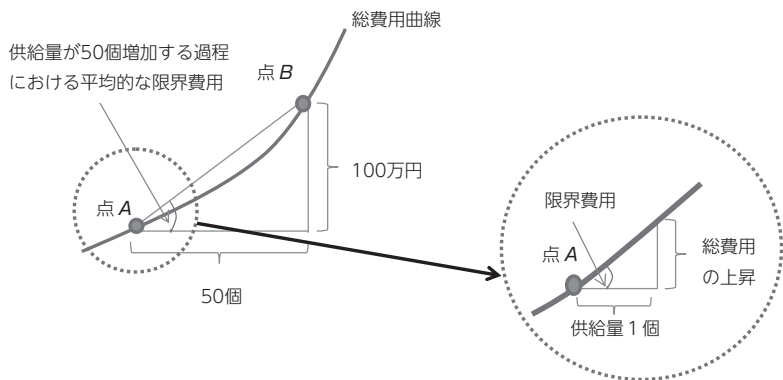
よって、

費用関数の微分＝費用曲線の接線の傾き＝限界費用

が成り立つ。

生産量を1単位増加させたときの費用の増加分（限界費用）がなぜ費用曲線の接線の傾きに等しくなるかについては、次のようなイメージを持っておくとよい。

下図の右は、費用曲線の一部を拡大したものである。点Aを基準に考え、供給量が50個増加したら総費用が100万円増加するとする。



この場合、供給量が50個増加する過程における平均的な限界費用は100万円÷50個＝2万円である。しかしながら本来は限界費用は1個単位で費用の増加分を考えるものであり、費用の増加分はつねに変化する。上記の右の図は点Aの周辺を拡大して1個単位で費用の増加分を考えたものである。点Aの周辺には先ほどよりはるかに小さな三角形が描かれることがわかる。そしてこの小さい三角形の傾きは費用曲線の接線の傾きにほぼ等しくなるので、等しいと見なしてしまうのである。

限界〇〇＝〇〇曲線（関数）の接線の傾き

■ 微分の公式

微分に関しては、基本的な公式を覚えておく必要がある。

$$f(x) = ax^b \Rightarrow f'(x) = abx^{b-1}$$

$$f(x) = a \Rightarrow f'(x) = 0$$

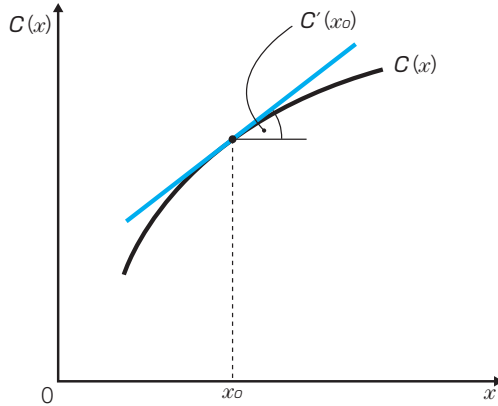
費用関数の例

$C(x) = x^3 - 2x^2 + 2x + 8$ とすると、

$$MC(x) = C'(x) = 3x^{3-1} - 2 \times 2x^{2-1} + 2x^{1-1} + 0 = 3x^2 - 4x + 2$$

となる。

たとえば、 $x = 2$ のときの限界費用は、
 $MC(2) = C'(2) = 3 \times 2^2 - 4 \times 2 + 2 = 6$
 となる。



また
 $C(x) = 2x^3 - 3x^2 + 5x + 7$ とすると、
 $MC(x) = 6x^2 - 6x + 5$
 となる。

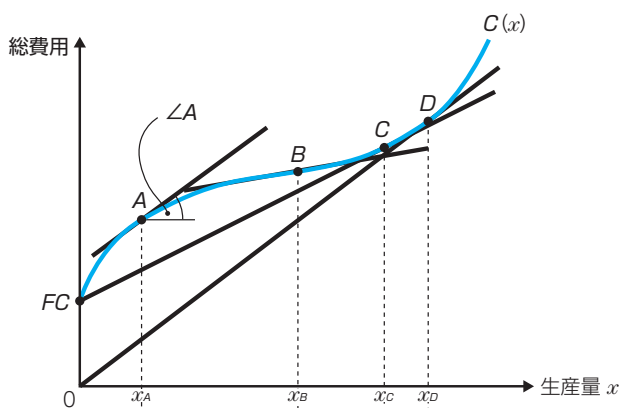
②▶ 限界費用曲線の導出

図表1-8の生産量 x_A を考える。このとき、①で指摘したとおり、限界費用はA点での費用曲線への接線の傾き $\angle A$ で求められる。これを図表1-8(b)にプロットする。

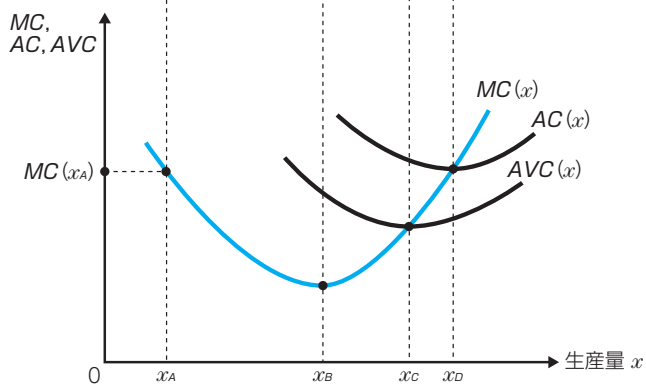
すべての生産量について同様の手順を行えば、生産量 x_B までは接線の傾きが通減し、 x_B 以上になると逕増するため、図表1-8(b)の $MC(x)$ のように限界費用曲線が描ける。

図表1-8(a)のように費用関数が逆S字型である場合、平均費用曲線と同様に限界費用曲線はU字型になる。

(a)



(b)



- 限界費用は費用曲線の接線の傾きで求めることができる。
- 費用曲線の接線の傾きが最小となる生産量において、限界費用は最小化する。

設 例

完全競争下で操業する企業の費用関数が次のように示されている。ここで、 C は総費用を、 X は生産量を表す。

$$C = X^3 - 2X^2 + 6X + 10$$

この企業の限界費用関数を求めよ。 [H19-13 (設問2) 改題]

解 答

限界費用関数は、費用関数を生産量 X について微分することで求められる。

$$MC = 3X^2 - 4X + 6$$

③▶ 平均費用、平均可変費用と限界費用の関係.....

限界費用曲線は、平均費用曲線、平均可変費用曲線の最小点を通る

理由

- ・ 図表1-8(a)の縦軸の切片 FC と点 C を結ぶ直線は、費用曲線の接線でもある。点 C は平均可変費用が最小となる点であり、同時に費用曲線の接線上にもあることから、この直線の傾きは平均可変費用の最小を表すとともに、限界費用も表している。よって、平均可変費用の最小の値とその点における限界費用は一致する。
- ・ 図の原点と点 D を結ぶ直線は、費用曲線の接線でもある。点 D は平均費用が最小となる点であり、同時に費用曲線の接線上にもあることから、この直線の傾きは平均費用の最小を表すとともに、限界費用も表している。よって平均費用の最小の値とその点における限界費用は一致する。

設 例

限界費用が最小となる水準で、限界費用と平均費用は等しくなる。

(×：平均費用が最小となる水準で、限界費用と平均費用は等しくなる。)

中小企業診断士 2018年度版

最速合格のためのスピードテキスト 4 経済学・経済政策

発行日 2017 年 12 月 1 日

初版発行

編著者 TAC株式会社 (中小企業診断士講座)

発行者 斎藤博明

発行所 TAC株式会社 出版事業部 (TAC出版)

〒101-8383 東京都千代田区三崎町3-2-18

電話 (営業) 03-5276-9492

FAX 03-5276-9674

<http://www.tac-school.co.jp/>

<https://bookstore.tac-school.co.jp/>

© TAC 2017

管理コード 07262P-00

〈ご注意〉

本書は、「著作権法」によって、著作権等の権利が保護されている著作物です。本書の全部または一部につき、無断で複製(コピー)、転載、改ざん、公衆送信(ホームページなどに掲載すること(送信可能化)を含む)されると、著作権等の権利侵害となります。上記のような使い方をされる場合、および本書を使用して講義・セミナー等を実施する場合には、小社宛許諾を求めてください。